

1 単元名 「Lesson 6 Imagine to Act」

2 単元の目標

- 仮定法過去 (if・I wish …) を理解し、それを含む英文を聞いたり読んだりして内容を捉える。
- 仮定法過去 (if・I wish …) を理解し、それを含む英文を即興で話したり、即興で伝え合ったり、正確に書いたりする。 **【知識及び技能】**
- Shitayama Poetry Contest で詩を発表するために、ものや動物視点の詩について、人との対比の中で仮定法過去を有効に使い、簡単な語彙や文を用いてまとまりのある文章を書く。
- スピーチを通して陸が伝えたいメッセージとその根拠や例をまとめるために、想像することの大切さについて書かれたスピーチを読んで、要点を捉える。

【思考力、判断力、表現力等】 【学びに向かう力、人間性等】

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・仮定法過去 (if・I wish …) の特徴やきまりに関する事項を理解している。 ・仮定法過去 (if・I wish …) などを活用し、タイムマシンがあったら何がしたいかや動物になったらできることについて、自分の考えを即興で話したり正確に書いたりする技能を身に付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチのメッセージとその根拠や例をまとめるために、想像することの大切さについて書かれたスピーチを読んで、要点を捉えている。 ・詩のコンテストに向け、ものや動物視点の詩について、自分の考えなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチのメッセージとその根拠や例をまとめるために、想像することの大切さについて書かれたスピーチをよんで、要点を捉えようとしている。 ・詩のコンテストに向け、ものや動物視点の詩について、自分の考えなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書こうとしている。

4 単元と指導の構想

(1) 単元と生徒

本学級の生徒は、教師からの声掛けに反応がよく、ペア活動やグループ活動では教え合いながら学習する様子がある。一方で4月当初は英語で書いたり話したりなど表現することを苦手とする生徒が多かった。そこで、毎日の授業の帯活動でコミュニケーション方略を使った small talk を行なったり、音読活動やプリント学習でもペアやグループの学習を取り入れたりと、コミュニケーションをする相手を意識した学習の時間を多く取り入れることで、表現することを恐れずに学習に取り組むことができる生徒が増えてきた。

本単元は学習指導要領改訂に伴い、今まで高等学校で学習していた仮定法過去を学習する。題材は「もしタイムマシンがあったら」などの仮定法過去を使った会話文から始まり、卒業スピーチの読み取りを行なった後、詩の作成を行う。ただし、今回の授業では生徒の活動への入りやすさを考慮し、仮定法過去を導入した後に詩の作成を行うこととする。生徒は前単元までに後置修飾や関係代名詞など、中学校3年間で学習をする主要な文法学習は終えており、今回の仮定法過去を使うことでさらに表現の幅を広げることが期待できる。

(2) 指導の構想

本単元のゴールである詩の作成の指導に当たっては、田中・田中（2003）が掲げる自己表現を支える4つ要素「信頼感・感受性・想像力・英語力」を大切にしたい。この中でも特に本単元では感受性や想像力に焦点を当てる。生徒の感受性や想像力を高めるために、活動の導入時にただ作品例を提示するのではなく、作品例の一部を隠して「あなたなら、ここにどんな表現を入れますか。」と、生徒の気持ちを揺さぶる工夫を行い、生徒の作品作成意欲を高めていきたい。

以上の単元のゴールに向けて、単元前半では仮定法過去の導入の中で、「もしもタイムマシンがあったら」や「私がこの動物だったら、何を願うだろう」など、詩の作成に繋がる感受性や想像力を刺激する活動が用意されている。画像や動画等を工夫しながら使い、生徒の想像力を高めていきたい。また、詩の作成後には陸の卒業スピーチの読み取りがある。「私の夢はタイムマシンを作ることです。」という思いもかけないフレーズで始まるこのスピーチを、陸は過去の発明家を例に真剣に語っていく。「陸はなぜこんな夢を持ったのか。」「過去の話から陸が伝えたことは何なのか。」について考えることを通して、最後は生徒が「新しいアイデアを生み出すためにはどんなことが大切か。」について自分事に置き換えて考えられるようにしたい。

5 単元の指導計画（全9時間）

時	学習のねらい（○）と主な活動内容（・）	評 価			
		知	思	態	評価規準
2	GET Part 1 ○仮定法過去 (if) を理解し、それを含む英文の内容を捉えたり即興で表現したりする ・本文の聞き取りと読み取り ・タイムマシンがあったらしたいことについて自分の考えを即興で話したり書いたりする	○			・文法の特徴やきまりに関する事項を理解している ・文法を活用し、自分の考えを即興で話したり書いたりする技能を身につけている
2	GET Part 2 ○仮定法過去 (wish) を理解し、それを含む英文の内容を捉えたり即興で表現したりする ・本文の聞き取りと読み取り ・動物になったらできることについて自分の考えを即興で話したり書いたりする	○			・文法の特徴やきまりに関する事項を理解している ・文法を活用し、自分の考えを即興で話したり書いたりする技能を身につけている
3	USE Write ○詩のコンテストに向け、ものや動物視点の詩について、まとまりのある文章を書く		○	○	・詩のコンテストに向け、ものや動物視点の詩について、自分の考えなどを

	<ul style="list-style-type: none"> ・詩のタイトルや内容を推測する ・シャーペンになり切って、詩を完成させる ・共通テーマ（教室の机）について詩を作成する ・ものや動物になり切って詩を作成する 				整理し、まとまりのある文章を書いている（書こうとしている）
2	<p>USE Read</p> <ul style="list-style-type: none"> ○想像すること大切さについて書かれたスピーチを読んで、要点を捉える ・英文に出てくる名言について考える ・スピーチ原稿の要点を考える ・新しいアイデアを生み出すために大切なことをグループで話し合う 		○	○	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチのメッセージとその根拠や例をまとめるために、想像することの大切さについて書かれたスピーチを読んで、要点を捉えている（捉えようとしている）

6 本時の計画（5時間目／全9時間）

(1) 本時のねらい

未完成のシャーペンについて書かれた詩について、シャーペンになり切って表現を考え、グループやクラスで紹介し合うことを通して、詩の作成における表現方法のコツに気づき、詩を完成させることができる。

(2) 本時の構想

前時までに生徒は仮定法過去の学習を終えており、仮定法過去を使って「もしタイムマシーンがあったら、どの時代に行って何をしたいのか。」や「ねずみくんになったつもりで、鳥だったらどうしたいか。」などの表現活動を行ってきた。最終的にものや動物になり切った英語の詩の作成に向け、本時は詩の作成の導入として、生徒の詩に対する感受性や想像力を刺激する活動を行う。

授業の冒頭では、生徒は提示される「黒板になり切った詩」を見ながら、詩の空欄に入る語句を推測する。その際、教師と生徒とのやりとりを通しながら、生徒がタイトルや詩の内容から詩の場面設定を考え、空欄に入るべき語句を想像しやすいようにする。

展開では、生徒はシャーペンになり切った未完成の詩を見ながら、空欄に入る表現を作成する。この詩は中嶋（2000）に掲載されている「I am an Mechanical Pencil」という生徒が作成した作品であり、シャーペンが「Ouch」と悲しんでいる絵が挿入されている。生徒の感受性や想像力をさらに刺激するため、以下の手立てで授業を行う。

- ①詩の挿入絵と後半部分の「Help… I don't like her. I wish I could be with another kinder person.」を生徒に提示し、詩の場面設定を確認する。
- ②「The mechanical pencil said, "Ouch". What happened with the owner?」と生徒に声をかけながら、Today's Goal「持ち主を嫌っているシャーペンになり切って詩を書くことができる。」を提示する。
- ③生徒はまず個人でロイロノートに詩を作成する。ここでは生徒の自由な発想を支えるため、全体での指示はできるだけ控え、生徒の想像力に縛りを設けないようにしたい。それと同時に、机間支援の中で個別に生徒に声かけを行い、支援が必要な生徒には授業の終末で提示する「英語の詩を作成する際のポイント」を少し伝え、詩の作成を支えたい。

④個人で作成した作品をグループやクラスで共有する中で、生徒は周囲からのコメントを受けながら自他の作品を振り返る。ここでコメントを伝え合うことで、生徒同士の信頼感を高め、その後の詩の作成への自己表現意欲の向上につなげたい。

授業の終末では、作成した詩の多様性に触れながら、英語の詩を作成する際の様々な表現方法を生徒から意見を募り、活動の振り返りを行う。また、最後に元となったシャーペンの詩を提示することで、今後の詩の作成に向けてさらなる作成意欲を高められるようにしたい。

(3) 展開

学習活動	教師の働き掛けと予想される児童生徒の反応	■評価規準（観点／方法）・○留意点
<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">導入（5分）</p> <p>1 Guess words! 詩の一部を隠し、詩の内容から、どんな語句が入るのかを推測する。</p>	<p>T1: I will show you a poem. This is a poem about blackboard. Here are three blanks. What words are in the blanks? Please guess!</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>The Last Day I am a blackboard. The students face me almost every day. Some look serious, some look sleepy. But some are _____ today, because it is our last day. I feel _____, too. I wish I could _____ with them.</p> </div> <p>S1: The last day ってことは最後の日。生徒にとって最後の学校の日。卒業式？</p> <p>T2: Good idea. So “Today” is “The graduation day.”</p> <p>S2: いつもは真剣そうだったり、眠そうな生徒が、今日は卒業式だから…悲しい？いや、泣いているかも。じゃ、sad とか cry かな。</p> <p>T3: Nice! But, is “The Last Day” only for the graduation day? You have three “last day” in a year.</p> <p>S3: あ、終業式とか。</p> <p>T4: That’s right! では、何が入るかな。</p> <p>S4: 終業式…、これから休みが始まるから嬉しいよね。Happy! (生徒の意見をどんどん拾っていく)</p>	<p>○表情のイラスト等を示しながら、生徒が空欄に入る語を場面を想像しながら考えることができるようにする。</p> <p>○教科書に”The Last Day”を卒業式と想定した「答え」があるが、設定によって詩が変わることを伝える。</p>

展開 (30分)

Make a poem!

2 内容の大部分が隠された詩を見て、詩の場面設定を確認する。

3 個人で詩をロイロノートに作成する。

4 Share your poems!
個人で作った詩を班で共有し、コメントを言い合う。

5 全体で作品を共有する。

T4: Next poem is this.

I Am a Mechanical Pencil



Ouch!

Help... I don't like her.
I wish I could be with another kinder person.

This time, you're a mechanical pencil.
The mechanical pencil said, "Ouch".
What happened with the owner?

Today's Goal

持ち主を嫌っているシャーペンにな

Let's become the mechanical pencil and fill in the blank (make a poem).
Please open LoiLoNote.

S4: (ロイロノートを使い、個人で空欄を埋め詩を作成する。作成後、提出箱に提出する。)

T5: Now everyone, time is up. Make groups and share your poems. Also, give comments to your members.

S5: (生徒たちは作成した詩をロイロノートを使って紹介し、メンバーが詩に対するコメントを言う。)

T6: Next, let's share your poems with other classmates. This is the poem of S6. S6, could you read your poem?

S6: Yes. (詩を紹介する。)

T7: Give him/her a big hand! (S6と同じ班のメンバーを指名して) S7, please give him/her a comment.

S7: シャーペンとその持ち主に何があったのか、その理由がとてもよくわかりました。

○絵と詩の結末を示すことで、生徒が簡単に詩の場面設定を把握できるようにする。

○机間支援の中で生徒に個別に声をかけ、必要に応じて個別にヒントを伝える。

○提出された作品に目を通しながら、何人かの生徒の作品を提示し発表してもらう。その際、その生徒と同じ班のメンバーからのコメントを紹介したり、クラス全体からのコメントも募る。

	<p>T8: Thank you. How about other comments, S8?</p> <p>S8: シャーペンになり切っていて、持ち主が嫌いな感情が伝わってきました。</p>	
<p>終末 (10分)</p> <p>6 Review</p> <p>Today's Goal のまとめとして、生徒のコメントから英語の詩を豊かにする表現方法のコツを、作品を見ながら振り返る。</p> <p>7 活動の振り返りシートを記入する。</p> <p>8 元の詩を提示する。</p> <p>9 Next class is ... 次時の活動の予告をする。</p>	<p>T9: では、今皆さんとシェアした作品や感想を元に、授業のまとめをします。</p> <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>まとめ 英語の詩のコツ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場面設定 (感情) を明確にする ・感情の理由を書く </div> <p>振り返りシートを記入しましょう。</p> <p>S9: (振り返りシート記入)</p> <p>T10: では、元の詩はどんな詩だったのでしょうか。見てみましょう。</p> <p>T11: 次回は「教室の机」をテーマに詩を作成します。どんな詩にしようか、今回みんなで考えた「英語の詩のコツ」を参考に、考えを膨らませておいてください。</p>	<p>○生徒が作成した詩とそれに対するコメントから、まとめは流動的に変更する。</p> <p>□詩の作成における表現方法のコツに気付き、詩を完成させることができる。(思考・判断・表現/ロイロノート, 振り返りシート)。</p>

(4) 評価

詩の作成における表現方法のコツに気付き、詩を完成させている。

板書計画

Monday, December sixth

学習課題
持ち主を嫌っているシャーペンになり切って詩を書くことができる。

- ・ Guess words!
- ・ Make a poem!
- ・ Share your poems!
- ・ Review
- ・ Next class is ...

The Last Day
I am a blackboard.
The students face me almost every day.
Some look serious, some look sleepy.
But some are _____ today,
because it is our last day.
I feel _____, too.
I wish I could _____ with them.

I Am a Mechanical Pencil

Ouch!

Help... I don't like her.
I wish I could be with another kinder person.

まとめ 英語の詩のコツ

- ・場面設定 (感情) を明確にする
- ・感情の理由を書く
- ・ものと持ち主のエピソードを書く

7 参考文献・資料

【資料】

①教科書 P96 掲載の詩（導入で扱う）

The Last Day

I am a blackboard.
The students face me almost every day.
Some look serious, some look sleepy.
But some are _____ today.
I feel _____, too.
I wish I could _____ with them.

A) crying, sad, cry

②中嶋（2000）P86 より。一部変更し提示する。



【参考文献】

田中武夫・田中知聡. (2003). 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 東京：大修館書店.
中嶋洋一. (2000). 『英語授業改革双書類 No.32 英語好きにする授業マネジメント 30 の技』 東京：
明治図書.